

Eureka III

六年制通信 No. 24 平成 27 年 11 月 20 (金) 号

歴史は繰り返しから逃れる

1 号館の職員室からマロニエの木が見えます。その下で読書をしている高 3 の女子を見かけたので(面識のない生徒でしたが)何の本を読んでいるのかと話しかけたら、ちょっと恥ずかしげに『沈黙の春』(新潮文庫)ですと答えてくれました。レイチェル・カーソンのかの有名な、環境問題の草分けとなった本だ、君は偉いなあ、翻訳が出ているのは知らなかったよと言ったら「はい」とにっこり微笑んですぐまた文庫本に目を落としていました。ちょっと心豊かになった瞬間でした。レイチェルはアメリカの生物学者で若い頃は作家志望でしたが、1962 年 *Silent Spring* を発表し、生物学者が環境問題に警鐘を鳴らした本として有名になりました。農薬が鳥などに与える悪影響を論じた本です。当時、出版に際しては多くの困難があったでしょうが(経済界に影響が大きいからね)彼女は勇気を持って真実を書いたのですね。『沈黙の春』を読む高校生に会えるとは思わなかったのが本当に嬉しかったけど、私自身は昔英語版を少し読んだだけで済ませてしまったので、こっちが少し反省させられました。

本もちゃんと読もうとすると疲れますね。推理小説のようなエンターテイメントなら、筋が追えればいいのですが、〇〇論とかいうタイトルだと何度も同じところを読み返さないとわからなかったり、比喩を使ってわかりやすく著者が書いたつもりなのにその箇所が読んでいる方にはわかりにくかったりしますから、骨が折れます。ましてこれが英語の本になると、しかも小説やエッセイの類だとなかなか読み通すのは困難です。専門書のような、使われている用語の定義がはっきりしている本の方が読みやすいくらいです。私もこれまでに何冊も何冊も挫折をしてきました。懲りずに同じ挫折を、今でも繰り返しています。毎回反省はするのですが、粘りが無いというか、そもそも英語力がないというか、悲しい限りです。毎夏には読書計画や勉強計画を私も立てるのですが、恥ずかしながら過去一度として達成したことはありません。歴史は繰り返すとはよく言ったものだと思います。

さて、松下幸之助が成功の秘訣を聞かれて「成功するまでやめないことだ」と言ったのは有名な話ですが、松下電器(現パナソニック)の創設者は長い年月をかけて事業を成功させた経験をこの言葉に込めたのでしょうか。科学者の中でもよくこの言葉を口にする人がいます。1 回の実験で満足いく結果など得られないことを肌で知っているのでしょうか。必ず「もうダメか」と感じる瞬間があるというのですね。しかし、何が足りなかったのかを検証し尽し、次はうまくいくかもしれない、成功するはずだと信じ、実験を繰り返していく。それでもうまくいかないものらしい。そして、何年も何

年も苦しい時間を経て、やっとの思いで実験成功となるわけですが、彼らはやはり、だからこそ「成功とは成功するまでやめないことだ」と言うのでしょうか。彼らもまた失敗の歴史を繰り返した経験を持っているだけに、この言葉には迫力があります。失敗は繰り返す、繰り返していい、けれども続けていけば成功するものだ、そこにはただ「やめない精神」だけが必要だということも、実体験に裏づけられた真実の言葉でしょう。ノーベル賞の大村博士も同じことを言われていました。若者へのメッセージをと請われて「一度や二度の失敗でやめないように」とね。

ところで、中高生の勉強は、考えてみれば「人生をかけて」などというレベルのものではないですね。成功するまでやめないことだ、などと気張るほどのことでもありません。こうすれば、これをやれば問題が解ける（君らの場合これが「成功」です）のですから、成功するまで、というよりちゃんと覚えるまで、と言った方が正確でしょう。これができないというのは、小学生のときの勉強がすでにできなかったのであって、ここでも歴史は繰り返しているだけのことでしょう。小学生のとき、君たちは君たちのペースで勉強をしてきたことと思います。よく言う、「自分なりに一所懸命」というやつです。三重中に入っても同じことを繰り返してしまった生徒もいるでしょう。しかし、この感覚を繰り返している生徒は学力の進捗が極めて難しいのです。中学のときに勉強する習慣ができ、英単語や公式など各教科の様々な細かい事実を覚えていくことができているならば、高校生になって成績は安定し、自分の夢を持つことができます。君たちは今、自分よりもたくさん勉強している同級生を見ているはずですが、彼らは彼ら、自分は自分、自分のできることをやろうという、一見非常に美しい言葉に酔って、つまりは自分のできないことはやらないという選択をしている人も多いのではないのでしょうか。ひょっとしたら、それを個性だと勘違いしているのかもしれない。現状に甘んじている自分を、自分らしいと考えてはいけません。

これまでの学力の伸びのまま進んでいけば大学受験に希望が持てない、そう漠然とした不安を抱えている人もいるでしょう。そういう人にとって、取り組まなくてはならないことは100mを9秒で走るような、誰もが不可能だと初めからわかっているようなレベルではありません。逆です。誰もができることだと言っていいと思います。ただしこれまでのような自分なりの勉強ではできないわけで、この意味において、君たちにとっては初めての取り組みとなっているはずですが、自分の殻を破るという表現はそういう人のためにある言葉でしょう。恐ろしいことに歴史は繰り返します。その恐怖感を持っている生徒は果たして何人くらいいるのでしょうか。知らない間に過去の亡霊が君の背中についている、そんな感覚がありますか。また同じことを繰り返してしまっているという感覚です。恐ろしい、とても恐ろしい感覚です。世界史的な意味では歴史は繰り返すものですが、個人の失敗の歴史を繰り返さない方法はあります。失敗したことを知ることから、それは始まります。失敗していることを知らない者が失敗を繰り返すのですから当然ですが、実はこれがなかなか難しいのです。センサーに乏しいわけです。過去の自分と向き合って、失敗を知ってごらん。そして、できるまで決してやめないことです。